

学位授与番号：甲 975 号

氏 名：横部 旬哉

学位の種類：博士（医学）

学位授与日付：平成 26 年 9 月 10 日

学位論文名：

痛みの評価スケールにおける表現方法の検討

主論文名：

**Preference for Different Anchor Descriptors on Visual Analogue Scales among Japanese Patients with Chronic Pain.**

(Visual Analogue Scale で用いられる、基準となる痛みの表現方法に関する、日本人の慢性疼痛患者における嗜好性)

学位審査委員長：教授 下山直人

学位審査委員：教授 柳澤裕之 教授 安保雅博

# 論文要旨

(2部提出)

論文提出者名

横部 旬哉

指導教授名 上園 晶一

## 主論文題名

### Preference for Different Anchor Descriptors on Visual Analogue Scales among Japanese Patients with Chronic Pain

(Visual Analogue Scale で用いられる、基準となる痛みの表現方法に関する、日本人の慢性疼痛患者における嗜好性)

ジャーナル名 : PLoS ONE

背景 : 痛みの評価スケールに関する preference は、過去の多数の研究において調べられてきた。しかし、ペインスケールで使用されている表現方法 (anchor descriptor) に関する preference は、ほとんど研究されていない。

目的 : ペインスケールの代表として Visual Analogue Scale (VAS) を選択し、VAS で用いられている表現方法についての、日本人の慢性疼痛患者における preference を調査した。また、preference が年齢、性別、教育水準、罹病期間、痛みの程度によって異なるかを調査した。

方法 : 東京慈恵会医科大学附属病院ペインクリニック外来に通院した、罹病期間 3 か月以上の非がん性慢性疼痛患者を対象とした。「最悪の痛み」(以下「最悪」)、「耐えられる (がまんできる) 最も強い痛み」(同、「我慢」)、「考えられる (想像できる) 最も強い痛み」(同、「想像」)、「今まで感じた (経験した) 最大痛み」(同、「経験」) の 4 つの異なる表現方法を用いた、4 種類の VAS を配置した質問用紙を作成した。過去 24 時間に感じた平均の痛みの程度を VAS に記すこと、わかりやすかった (答えやすかった) 順、および、自分の痛みを正確に示すことができたと思う順に、1 位から 4 位まで順位をつけることを指示した。

結果 : 本研究の参加者は 183 人で、65.0% が女性で、35.0% が男性であった。年齢は 18-84 歳で、平均年齢は 56.9 歳であった。「経験」がもっとも preference が高く 69.8% で、次いで「我慢」(66.3%)、「最悪」(48.8%)、「想像」(16.9%) の順であった。年齢、性別、教育水準、罹病期間、痛みの程度による preference に関する明らかな差は認めなかった。83.1% の者が、

「最もわかりやすかった (答えやすかった) 表現」と、「最も自分の痛みを正確に示すことができたと思う表現」は同一の表現を選択した。

結論 : 最もよく用いられている「想像できる最大の痛み」は、多くの者にとって理解することが容易ではないことが明らかとなった。痛みの評価をする際には、「これまで経験した最大の痛み」や「我慢できる最大の痛み」などの、多くの者が理解しやすい表現方法を用いるべきである。

## 論文審査の結果の要旨

横部旬哉氏の学位申請論文は、主論文1編からなり、主論文の原題は「Preference for Different Anchor Descriptors on Visual Analogue Scales among Japanese Patients with Chronic Pain」、日本語原題は「Visual Analogue Scale で用いられる、基準となる痛みの表現方法に関する、日本人の慢性疼痛患者における嗜好」である。

### 1. 研究の背景：

痛みの評価スケールに関しての preference は、過去の多数の研究において調べられてきた。しかし、ペインスケールで使用されている表現方法(anchor descriptor)に関しての preference は、ほとんど研究されていない。

### 2. 研究目的：

ペインスケールの代表として Visual Analogue Scale(VAS)を選択し、VAS で用いられている表現方法についての、日本人の慢性疼痛患者における preference を検討する。また、preference が年齢、性別、教育水準、罹病期間、痛みの程度によって異なるかを検討する。

### 3. 方法：

東京慈恵会医科大学附属病院ペインクリニック外来に通院した、罹病期間3か月以上の非がん性慢性疼痛患者を対象とした。「最悪の痛み」(以下「最悪」)、「耐えられる(がまんでいける)最も強い痛み」(同、「我慢」)、「考えられる(想像できる)最も強い痛み」(同、「想像」)、「今まで感じた(経験した)最大痛み」(同、「経験」)の4つの異なる表現方法を用いた、4種類のVASを配置した質問用紙を作成した。過去24時間に感じた平均の痛みの程度をVASに記すこと、わかりやすかった(答えやすかった)順、および、自分の痛みを正確に示すことができたと思う順に、1位から4位まで順位をつけることを指示した。

### 4. 結果：

本研究の参加者は183人で、65.0%が女性で、35.0%が男性であった。年齢は18-84歳で、平均年齢は56.9歳であった。「経験」がもっとも preference が高く69.8%で、次いで「我慢」(66.3%)、「最悪」(48.8%)、「想像」(16.9%)の順であった。年齢、性別、教育水準、罹病期間、痛みの程度による preference に関する明らかな差は認めなかった。83.1%の者が、「最もわかりやすかった(答えやすかった)表現」と、「最も自分の痛みを正確に示すことができたと思う表現」は同一の表現を選択した。

### 5. 結論：

最もよく用いられている「想像できる最大の痛み」は、多くの者にとって理解することが容易ではないことが明らかとなった。痛みの評価をする際には、「これまで経験した最大の痛み」や「我慢できる最大の痛み」などの、多くの者が理解しやすい表現方法を

用いるべきである。

痛みの評価スケールとして、Visual Analogue Scale (以下 VAS)を用い、その最大の痛みを表わす日本語として、「想像できる最大の痛み」か「耐えられる最大の痛みか」か「今まで経験した最大の痛みか」か、など4つの異なる言葉で答えやすかったものを選択してもらい、何が適しているのかを、何を使用するのが患者に適しているかを検討しています。結果としては、今まで経験した最大の痛みが最も preference が高く 69.8% であり、一般的によく使用されている「想像できる最大の痛み」は多くの患者にとって理解しがたい評価法であることが判明しました。

#### **6. 審査結果：**

この博士論文の研究に関して公開審査会が行い、1. 痛みの評価として VAS を選択した理由、2. 痛みの評価ができなかった症例の割合、3. 4種類の言葉をランダムに患者に尋ねたのかどうか、4. 心理テストとしてのカットオフ値は、5. がん性疼痛、急性疼痛との違いは、6. 侵害性疼痛と神経障害性疼痛との違いは、7. 年齢層の違いを検討したのか、など、計16項目に関して確認を行い、その結果、本論文は博士号に見合うものと判定されました。